

保安庁官ピーテル・ガーボル逮捕

ハンガリー動乱 50 年：動乱を招いた暗黒時代（その 8）

盛田 常夫

動乱分析の意味

ヒトラーやナチを題材にした映画は今も頻繁に制作・上映されている。現在、日本で上映中のトム・クルーズ主演「ワルキューレ」は、ベルリン陥落に先立つおよそ 1 年前に仕組まれたヒトラー暗殺計画をテーマにしたものだ。昨年封切された「わが教え子、ヒトラー」は追い詰められたヒトラーに演説の教師役を務めたユダヤ人教授の物語。さらには、奇才ソクーロフの 4 部作の 2 作目「モレク神－ヒトラーの日々」は、ザルツブルグ山岳地帯にあるヒトラーの別荘での日常を描いたもの。

このように、ヒトラーとナチスドイツは、今もなお映画の題材として魅力を失っていない。人類史上、最大の虐殺を遂行した人物やその取り巻き、ナチズムの犠牲者やヒトラー暗殺計画は、汲みつくせないほどの問題性や謎を孕んでいるからだ。同じことは、同時代のソ連の独裁者スターリンについても言える。しかし、スターリンにかんする映画はきわめて少ない。20 世紀のロシアがスターリンの個人支配に嵌ってしまったが、史上稀にみる恐怖独裁体制を樹立したその中心人物を描く映像がないのは不思議である。北朝鮮の体制もまたスターリン的独裁のなれの果てであり、まさに博物館的な価値をもっている。独裁下の人々には悲劇的な体制だが、時代に遅れた体制は喜劇的すらある。その意味でも、スターリン体制解明は現代においても適時性を失っていない。スターリンにたいするさまざまな暗殺計画が存在したはずだし、それを感知した独裁者が狂気の沙汰とも言える処刑や殺人を指示していたことは、ヒトラーと同様に、汲みつくせぬほどの謎に包まれている。その解明や推理は十分に映画の題材になるはずだが、何故かほとんど手が付けられていない。

スターリン主義体制解明の最大の障害はロシアそのものだろう。共産党独裁体制が解体されたとはいえ、現在のロシアはスターリン体制を支えた旧保安（秘密）警察（出身グループ）が権力を握っている。ロシアでは形を変えた独裁権力が維持されている。明らかに、ロシアはスターリン主義（体制）と本質的に決別していない。したがって、旧共産党時代、とくにスターリン主義時代の保安警察の大量殺人やスターリンの指示系統について、解明を阻む障害が陰に陽に存在する。スターリン時代の映像化にはそれなりの事実関係の解明が前提されるが、それができないところに、スターリンとその時代の映画化が難しい最大の要因があると考えべきだろう。

もっとも、同じことは日本でも見られる。天皇制国家における侵略犯罪がほとんど解明されず、歴史の中に葬られ、その映画化すら難しいのは、ロシアと同じ理由があるからだろう。日本社会は天皇制国家による全体主義体制を自らの意思で否定してこなかった。だ

から、今でも何の疑問を抱くことなく、政府の号令でマスクを一斉に着用したり、一斉に取り外したりする。外から見ていて気色悪い。インフルエンザにかかって会社に迷惑をかけたなら会社にいられなくなるとか、学校が休校になれば学校に謝らなければならないと意識はいったい何だろうか。日本にはそれをおかしいと感じさせない社会力が働いている。北朝鮮は特別な存在だが、しかしアジアの諸国は多かれ少なかれ、20世紀の全体主義から抜け出してはいない。北朝鮮はけっして日本社会の対極に位置する国家ではない。日本を含めアジアの諸国はそれを他山の石とすべきだろう。他人事ではないのだ。

ハンガリーについても同じことが言える。戦後のハンガリー共産党、とくにラーコシ書記長の独裁的支配下における保安警察の殺人事件やその下手人たちについて語ることは、ハンガリーでは歓迎されない。多くの政治家の直系の肉親が何らかの形で共産党独裁の暴力的な支配にかかわってきたからである。臭いものに蓋をするのはどの国でも同じ。そう考えると、ドイツ人の手によるナチスとヒトラー断罪は、非常に稀な事例だと言える。しかし、人類がもっと賢くなり、過去の過ちを繰り返さないためにも、歴史的な犯罪を解明し検証することが不可欠なのだ。

本誌における「ハンガリー動乱へ至る歴史」を探ることは、ハンガリーにおけるスターリン主義体制の確立と崩壊を分析することでもある。本家のロシアで解明が難しいのであれば、その衛星国におけるスターリン主義の影響を解明することでしか、歴史を紐解くことができないのである。

ブダペスト 12 区

ハンガリー共産党の戦後史において、ブダペスト 12 区は重要な位置を占めている。なによりも、数々の事件の舞台になったラーコシの邸宅がローラン通りにあった。サカシッチ最高幹部会議長が逮捕されたのはこのラーコシ宅で、その地下室に監禁された。中欧の共産党幹部粛清劇の始まりとなったのは、本誌の連載でも詳しく記述したように、アメリカ人 коммуニストのノエル・フィールドの拉致・監禁であるが、その拷問が実行されたのは、ローラント通りからイシュテンヘジ通りを上った後に連なるエトヴォシュ通りにある保安警察の秘密の館である。また、日本人学校があるヴィラニョシュ通りの保安警察の秘密の館には、ソ連の保安警察のアドヴァイザーたちが常駐していた。

現在の政府迎賓館は 12 区のペーラ・キライ通りにある。通りからは何も見えないが、中には広大な敷地にホテルのような宿泊施設が建っている。1952 年初め、この場所に豪華な館が 4 棟建設された。共産党幹部のヴァシュ・ゾルターンの着想で、ゲルー・エルヌー、ファルカシュ・ミハーイ、レーヴァイ・ヨーゼフの最高幹部とヴァシュ自身が居住する館として建設されたものだ。ラーコシがこの館に入らなかったのは、やがて再建される王宮に入る予定だったからだと言われている。

1952 年はラーコシの還暦年にあたり、スターリンの生誕 70 年をオペラハウスで盛大に祝ったのに倣い、自らを神格化するのに執心していた。ハンガリーの社会組織は皆、ラー

コシの誕生日に合わせてプレゼント合戦を行い、ラーコシ絶対化への道を歩み始めた。そうした事情もあって、1952年を境として、共産党の最高幹部の中でも、ファルカシュ・ミハイとの関係が悪化するようになった。ファルカシュは次第にラーコシと距離をとるようになり、夏の国会における首相就任式にも出席しないという関係にまで陥ってしまった。ラーコシよりはファルカシュの方が、ソ連共産党との繋がりが強く、ソ連共産党の後押しがある。だから、ラーコシに対抗しても簡単には失脚しないという自信があったと思われる。実際、ラーコシはモスクワにおいて、スターリンとモロトフを前に、ファルカシュとの関係悪化を問いただされ、それを断固として否定せざるをえなかった。しかし、ハンガリー共産党内ではラーコシの組織掌握術に一日の長があり、ファルカシュは後塵を拝していた。この力関係が後の両者の関係の展開に大きく影響する。

ちょうどこの時期、チェコではスランスキー共産党書記長を狙い撃ちにした粛清劇が展開しており、ラーコシにとってもチェコの動向は気にかかるものだった。というのは、明らかにチェコ共産党幹部の粛清は、ユダヤ人幹部を狙いを定めたものであり、スターリンとその側近であるベリヤの意思であることは明瞭だったからである。ラーコシを含めたハンガリー共産党の最高幹部4名はみなユダヤ人である。だから、最高指導者であるラーコシには何としてもスターリンの歡心を買ひ、粛清の対象になることから逃れる必要があったと思われる。

ピーテル・ガーボル逮捕

1952年暮れ、ソ連では内務大臣アバクモフが「アメリカのスパイ容疑」で逮捕され、同時に内務省幹部たちも逮捕・監禁された。その中に、中東欧の粛清劇を指揮してきたベルキンもいた。そこから、「ハンガリーのスパイの親分」として、保安警察長官のピーテル・ガーボルの名前が挙がった。これはスターリンの疑心暗鬼が側近の粛清に向かわせた最後の事件である。ベリヤはピーテル・ガーボル逮捕の指令をラーコシに発し、ラーコシはローラント通りの私邸にピーテルを招き、その場で逮捕したのである。

ノエル・フィールドの逮捕から始まり、外務大臣ライク・ラスローの逮捕・処刑、サカシッチの逮捕・処刑、リース法務大臣の虐殺、配下の部下スーチ兄弟の虐殺、カーダールの逮捕の一連の粛清劇を指揮してきたラーコシの片腕ピーテル・ガーボルが、粛清の対象になったのである。ピーテルの妻はラーコシの個人秘書でもあった。ピーテル逮捕と同時に、妻のシモン・ヨラーンも逮捕された。まさにスターリン主義の狂気がラーコシを通して、ハンガリーに伝播したのである。

ピーテル逮捕と同時に、保安警察の取調官もまた大量に逮捕・拘束された。その中には、ノエル・フィールド、ライク・ラスロー、リース・イシュトヴァーンの逮捕や処刑、虐殺に関係していたパウエル・ミクローシュやセンディ・ジョルジュが含まれていた。いずれも「CIAのスパイ」容疑で逮捕された。カーダールもまた、拘束されたまま獄中にあった。

スターリンの死まで後3か月。従順にスターリンとソ連共産党の指示に従ってきたラー

コシは、スターリンの死によって窮地に追い込まれるが、自らの責任をファルカシュに押し付けることによって、延命を図る。これにたいして、スターリン後のソ連共産党政治局もラーコシを見限ることなく、ラーコシの組織掌握手腕に期待し、ラーコシの筋書きにしたがってファルカシュに責任をとらせた。社会騒乱が統制不能になるまでラーコシや、ラーコシ追放以後は、同じくラーコシ一派のゲルーに頼ったことが、その後の社会的大混乱を帰結することになった。

(関連する分析は、<http://morita.tateyama.hu> を参照されたい)